

中国・寧波 米国・アーリントン 静岡・伊豆の国

3姉妹都市相互理解深め

長岡京市友好交流協会が今年、設立40年を迎えた。友好姉妹都市となっている中国・寧波市や米国・アーリントン、静岡県伊豆の国市の3都市との親善活動を進めてきた。一方、多くの人にとって海外が身近になった今、都市同士の交流に求められるものは何か。28年間にわたり会長を務めてきた小原勉さん(84)に聞いた。

(聞き手・山田修裕)

長岡京市友好交流協会 小原会長に聞く



「友好交流で築いた成果を次の世代へつないでいくことが重要」と語る小原会長
(長岡京市神足・工進本社)

長岡京市は1983年に寧波市、翌84年にアーリントンと旧伊豆長岡町(現伊豆の国市とは2006年)と友好姉妹都市になった。協会は86年2月に設立された。

「定期的に両都市の代表団が相互に訪問するのに加え、寧波市には公募した市民が訪れるなど交流が盛んだ。交流をきっかけとした発展事例もみられ、長岡京市の事業所が相手都市に進出したり、研修生を受け入れたりと、中学生がアーリントンへ短期留学したりしている。伊豆の国市とは災害時に互いに支援する協定を結び、芸術やスポーツの催しを通じた交流、市職員の人事交流も行っている」

「長岡京市民が身近に参加したり見たりできる取り組みは何か。市内でもさまざまなイベントを開催している。毎秋の長岡京ガラシヤ祭への参加やブース出展以外にも、寧波市から料理人を招いた中国料理の講習会、市民向けの英会話講座を催すなど国際理解の機会につなげている」

「海外が今や身近になる中で、友好姉妹都市交流の持つ強みは何か。協会の今後の課題は。一例えは個人で海外を訪れても公的な機関でそのまちについて詳しく話を聞ける機会はほぼない。都市開発や子ども教育の在り方など現地の実態に触れられるのは、友好姉妹都市として築いて来た関係性があればこそ。情勢が目まぐるしく動く現代だからこそ、相互理解や友好親善、平和への貢献に取り組んできた協会の活動は一層重要になる。一方で協会員は年々高齢化している。交流を次世代につなぐため、こうした活動に若い人にも参加してもらえようPRする必要がある」

設立40年 協会員高齢化、若者も参加を

「海外が今や身近になる中で、友好姉妹都市交流の持つ強みは何か。協会の今後の課題は。一例えは個人で海外を訪れても公的な機関でそのまちについて詳しく話を聞ける機会はほぼない。都市開発や子ども教育の在り方など現地の実態に触れられるのは、友好姉妹都市として築いて来た関係性があればこそ。情勢が目まぐるしく動く現代だからこそ、相互理解や友好親善、平和への貢献に取り組んできた協会の活動は一層重要になる。一方で協会員は年々高齢化している。交流を次世代につなぐため、こうした活動に若い人にも参加してもらえようPRする必要がある」